

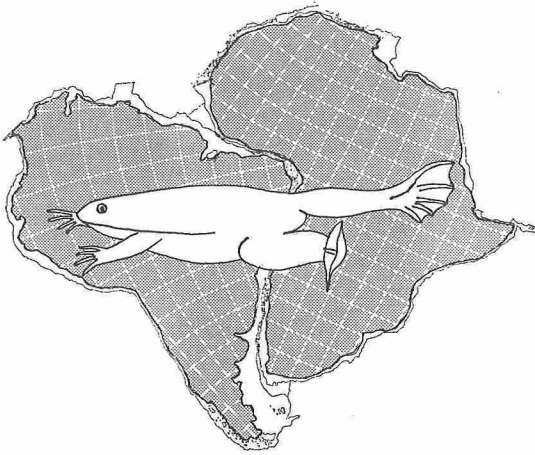
広報

— 7 卷 1 号 —

昭和 50 年 2 月

目次

一数学者の妄想	小平邦彦……(2)
小平教授と Princeton の思い出	河田敬義……(3)
小平邦彦教授の業績	飯高茂……(5)
Silverfish のごとく 40 年	門司正三……(6)
門司先生の御活躍	佐伯敏郎……(7)
門司正三教授	古沢潔夫……(8)
定年所感	浜口博……(8)
浜口博先生	馬淵久夫……(9)
私の読んだ本(18)	蟻川達男……(10)
《学部消息》	(11~15)



アフリカツメガエル *Xenopus laevis* DAUDIN

実験用動物として著名なアフリカツメガエル。実験——卵を集めて核を抜き取り、その代りに、既に発生進行中の胚の細胞、あるいはオタマジャクシの腸細胞の核を一つずつ移植する。結果——各々の卵は発生を開始し、やがて核を譲り受けた個体と全く瓜二つのオタマジャクシや蛙が続々と誕生する。考察——細胞核には全て、原理的には体の全ゆる部分を作る事が可能な情報が納められている、etc.

ツメガエル分身術の巻。

アフリカツメガエルは蛙としてはたいへん原始的な種で、舌を持たず、陸へ上ることがない。仲間の片割れは遠く大西洋を隔てた南米の河川に生息する。不連続な分布の謎解きとして、アフリカと南米大陸の壮大な分離と移動を考えれば興味尽きない。(重井陸夫：臨海)

一 数 学 者 の 妄 想

これは本当の話だとあの嘘つきの爺が申しました

——漱石「猫」より——

小 平 邦 彦 (数学)

私は教養に乏しい単純な数学者で、数学とは何かという古来の難問については何も分らないし、またそれを論じる資格もないが、しかし数学を研究して生活している以上、数学についての感想というようなものは勿論もっている。これについて且つて「数学のすすめ」に書いたことがある。この感想が最近次第にエスカレートして、遂に「数学は森羅万象の根底をなしている」という妄想に発展した。

数学は自然科学に実に不思議なほど役に立つ。しかも、多くの場合、自然科学の理論に必要な数学はその理論が発見されるはるか以前に予じめ数学者によって準備されている。そのよい例は Einstein の一般相対論における Riemann 空間である。しかも Riemann は、「時空は認識の先験的形式である」というような戯言が信じられていた時代に、われわれの住んでいる空間が果して Euclid 空間であるか曲率をもった Riemann 空間であるかは経験的事実によらなければ分らない、と言って一般相対論を予言したのである。

数学がどのように自然科学の役に立つのは何故か？勿論数学は自然科学を記述する言葉であると言って片付けてしまえばそれまでである。たとえば一般相対論における Riemann 空間の役割は一種の言葉であると言えるかも知れない（私はそうは思わないが——単なる言葉に予言する力があるとは考えられない）。しかし量子力学においては数学が全く神秘的魔法的な役割を演じるのであって、到底単なる言葉とは考えられない。例えば量子力学で基本的な重ね合わせの原理は、粒子の状態の重ね合わせの物理的意味がよく分っていてそれを状態を表わす波動関数の一次結合という演算で表現したのではなく、波動関数の一次結合が状態の重ね合わせを表わすことを公理として認め、数学の演算によって重ね合わせの意味を確定したものである。Feynman が言うように、重ね合わせの原理をこれ以上説明することは出来ないのであろう。量子力学は数学の不思議な魔力に基いているとしか考えられない。ゆえに私は物理現象の背後に数学的現象なるものが実在していると思うのである。

さらに不可思議なのは確率論である。周知のように、確率論は出たために起こる現象もある数学の法則に従うことを示す。しかもわれわれは現象が出たらめか否かをそれが確率の法則に従っているか否かによって判定するのである。量子論によれば自然現象は徹視的に見ればすべて確率的であるという。森羅万象の根底に数学的現象が厳然として実在していると考えられる所以である。

数学者は、たとえば物理学者が物理的現象を研究していると同じ意味で、数学的現象を研究しているのである。数学を理解するということは、その数学的現象を“見”ることである。“見る”というのは勿論目で見るとは異なるが、ある種の感覚によって知覚することである。私は且つてこの感覚を数覚と名付けたことがある。数覚は、一寸説明し難いけれども、論理的推理能力とは異なる純粋な感覚であって、数覚の鋭さは、たとえば聴覚の鋭さと同様に、いわゆる頭の好し悪しとは関係がない。一般に数学は緻密な論理によって構成された論理的な学問であると思われているが、私は数学は高度に感覚的な学問であると思う。数学を理解するには数覚によってその数学的現象を感覚的に把握しなければならぬのであって、論理だけではどうにもならないのである。数覚のない人に数学が分らないのは盲に絵画が分らないのと同様である。このことは数学の出来ない子供の家庭教師をして見ればすぐに分る。こちらには目の前に見えている現象が子供にはどうしても見えないので説明に苦しむのである。しかもその子供が社会問題、等について堂々たる議論を展開するので嘔然とするのである。普通の論理は誰にでも分るのであるから、数学が論理に帰着されるものならば、数学も誰にでも分る筈である。ところが、中学校、高等学校で数学の分らない生徒が少くないことは周知の事実である。教授会、委員会、等において数学者が一般に議論に弱いこともまた周知の事実である。私は、論理は数学を記述するための文法の様々なものであって、数学は論理とは本質的に異なる感覚的な学問であると思う。数学者は定理を証明するとき主として数覚を用いていることを自覚しないから論理的に厳密に

証明したと思うのであろう。

数覚は数学者にも判然とは自覚されないが、それは人類の進化の過程において未だ rudimentary な感覚であるからであろう。人類最高の頭脳：プラトン、キリスト、釈迦、等が 2000 年の昔に現われたことから見ても、人間の脳髓の構造は一万年前から殆んど変わっていないと考えられる。一万年前に洞穴に住んで石と棍棒で野獣と戦っていた人間にとっては、抽象的な現代数学を理解し得るような数覚はおおよそ無用な長物であった。生物は自然淘汰によって進化するという進化論によれば、このような無用な感覚が発達した筈がない。人間の数覚が rudimentary なのは当然の事であって、現代の数学者程度の数覚をもった人間が存在することの方がむしろ不思議である。数学が苦手な人が少なくないのも当然の事である。

現代の数学の成果は数学者以外の人には先ず絶対に分らないし、数学者でも同じ専門の数学者以外には殆んど分らない。同じ専門の数学者にとってもそれを理解するには相当の時間と労力を要する。これも人間の数覚が全く rudimentary なためであろう。

この辺の事情を説明するために、次のような状況を想定して見よう：殆んど全部の人間が色盲で、極めて少数の人間だけが rudimentary な色彩感覚をもっているとする（猫は色盲であると言われるが、人間もその進化の過程がもう少し違っていたならば、このような事態もあり得たであろう）。そしてこの少数の人間が色彩画家としても称する集団をつくって色彩のある絵をかくとしよう。この絵は勿論大部分の人間には分らないし、また色彩画家どうしの間でも、辛じて色を判別できる程度の色彩感覚しかもち合せていないから、よほど努力しなければ分らない。ここが赤だからこの隣りは論理的に考えて

青ではなかろうか、というような調子になるであろう。

私はわれわれ数学者の現状はこのようなものであろうと思うのである。将来人類が進化して数覚が発達した暁には、現在われわれが苦心して証明している定理が数覚によって一目瞭然証明なしに分るようになるのではなかろうか？

それでは果して人類の進化に伴って人間の数覚が発達するであろうか？ 勿論人類が進化しつつあるのか、それとも滅亡に向っているのか分らない現在、こんなことが分る筈はないのであるが、Bernard Shaw: Back to Methuselah, Part V に描かれている 31,920 A. D. の世界を眺めると、数覚は発達するものらしく見える。この未来の世界では、赤坊は卵から生れ（一寸進化が早すぎるようだが）、生れたとき既に体も知能も現代の人間の 18 歳の程度で、満 4 歳で成人するまでの 4 年間、ダンス、音楽、絵画、彫刻、生命科学の実験、等をして遊ぶ。そして満 4 歳になると男も女も完全に禿げて区別がつかなくなり、それから先は落雷、等の事故で死ぬまで何百年でも数学を考えて暮らすのである。尤も数学とはっきり断ってあるわけではないが、満 4 歳に近づいた女の子が “The properties of numbers are fascinating, just fascinating” と言って遊び相手の 2 歳の男の子をがっかりさせる場面があるから、考える対象は数学に違いないと思う。妄言多謝。

ところで現在物理学科は 20 講座あるが、数学科は僅か 9 講座しかない。諸々の自然現象の根底をなす数学的現象を探究している数学科はせめて 15 講座位はあってもよいのではなかろうか？ 停年退職に当って理学部の諸先生に数学科講座増に対する御援助をお願いする次第である。

小平教授と Princeton の思い出

河田敬義 (数学)

小平邦彦教授（以後小平君と呼ばせていただく）とは昭和 10 年に理学部数学科に入学して以来のお附合で、思い出も多い。小平君は数学科と物理学科の両方を卒業した。初め短期間東京文理科大学で、ついで東大理学部の物理学科および数学科で教えられた。昭和 10 年～13 年の学生時代は、新しい数学にふれて、実に楽しい時代であった。しかし、やがて戦争が本格的に進ん

で来ると、世間一般の見方では“呑気に”数学など勉強している時代ではなくなって来た。昭和 19 年になると、もう東京での生活はできなくなって来た。その時小平君は率先して、物理学教室および数学教室の一部を長野県の諏訪に疎開させた。この時の実行力は高く評価されている。疎開先の山村で小平君は一人で研究にうちこんでおられた。その研究結果は学士院記事にシリーズと



小平邦彦教授 (多様体論国際会議場にて)

して発表された。これらは戦後まとめて一つの大きい論文として、Princeton の H. Weyl 教授に送った。これが *Annals of Mathematics* に発表された有名な調和積分の理論である。Weyl 教授は自分の Riemann 面の理論が多変数の場合に美しく拡張されたことを非常によく見て、早速に小平君を Princeton の高級研究所に招いた。1949 年夏のことである。

これから小平君の Princeton 時代がはじまる。1954 年の Amsterdam での万国数学会議 (Congress) で、Fields 賞を受賞するまでの数年間は、多変数 Riemann-Roch 定理をめぐる複素多様体の解析的理論の研究がなされた。Amsterdam では、Fields 賞は Weyl 教授の手で小平君に渡され、Weyl 教授による業績の紹介がなされた。これは Congress の Proceeding に印刷されているが、Weyl 教授が小平君をどんなに高く評価していたかということがよく分る。

Princeton の高級研究所は、戦後外国に行くことの不便な時代に、多くの日本人を受け入れてくれた。私も、1952 年夏から 54 年春まで滞在することができた。それ以前にも、Princeton には理論物理の湯川・朝永両先生や、数学の角谷、岩沢、矢野の諸氏等がおられたが、私の行った年には、数学で、佐々木重夫、後藤守邦、山辺英彦の諸氏、物理の南部陽一郎、木下東一郎氏、地球物理の岸保教授、化学の田丸教授も来られて、大そう日本

人の賑かな年であった。小平君は、二人の小さいお嬢さんも一しょに楽しい家庭をもっておられ、新らしく来た大勢を一家あげてころよく受入れて下さった。われわれの多くは家族とはなれて単身ということもあって、だんだんと馴れなれしくなって、毎週週末には日本人パーティのような形で小平君の家に集まってしまった。本当に今日考えると冷汗の想いである。

小平君は、アルコール類は余りたしなまないようであるが、甘い菓子など好物のようであった。もっとも、その頃日本ではまだおいしい菓子などほとんどなかったといってよい。小平君はまたいろいろの種類の本を沢山に買って来た。何時読むのか分からないが、いろいろの事に通じていた。Time や Newsweek などにも目を通して、いろいろの面白い News を聞かせてくれた。また小平君のピアノ、夫人のバイオリン等音楽一家であり (後に二人のお嬢さんはピアノとバイオリンを本格的に修業したのであるが)、沢山のレコードや楽譜を持っていた。要するに、故郷をはなれたわれわれにとって、余りにも暖い場所が、そこにあったのである。

さて、小平君の研究にとって、Princeton の D. C. Spencer 教授の存在は見逃すことができない。Spencer 教授の人柄は卒直で、よいアメリカ人の一つの典型である。疲れを知らない研究一途のうちに、いたわりと善意に満ちており、小平君と大に通じるところがあったのであろう。大学で開かれた毎週一回の小平—Spencer のセミナーは、人数は多くはなかったが、活気に溢れていた。私も専門外ながら 2 年間出席した。ここでは当時流行となった層の理論、層係数のコホモロジー論などが話題となるが多かった。実際、ほとんど毎月のように National Academy の Proceedings に Kodaira—Spencer の報告があった。Hodge 多様体が射影空間に埋めこまれるという話や、またドイツから来ていた若い F. Hirzebruch の Riemann-Roch 定理の証明など、このセミナーで聞いた話であって、今日まで感銘が深い。

小平君にとって、この頃は年令としてほぼ 40 歳であり、そこまでの研究がいわば前手であった。その後さらに複素構造変形の理論、複素曲面分類理論等の大きい研究がつづく。Princeton 大学から、Harvard 大学、Johns Hopkins 大学、Stanford 大学をへて、ついにわれわれ多くの希望をかなえて、1968 年夏に東大に復帰された。東大在職は 7 年間ほどであったが、その間多くの後継者を育てた。一昨年東京で開かれた多様体論国際会議では、小平君の門下生の多くの研究発表をふくんで、我が国のこの分野での業績を示すことができたことは、小平君にとってもうれしいことであつたらう。ただ

東大紛争があったり、また心ならずも理学部長をつとめなければならなかったことは、小平君自身にとって研究の時間と精力とを奪われた点で気の毒であった。公への奉仕は尊いことであるが、広い目で見えて考えるべきであ

ろう。しかし、小平君は還暦をすぎても、まだ十分に研究を進めていかれるにちがいない。御健勝を祈る次第である。

小 平 邦 彦 教 授 の 業 績

飯 高 茂 (数学)

小平邦彦教授の数学的業績はまことに偉大であって、教授の名を逸しては、現代数学の多くを語りえない。もとより、業績の紹介は不可能事で、私など筆者としても不適任であるが、数学教室外の方々に話題を提供する意味で少しくパルプを消費させていただこうと思う。

函数論の初歩で、多価性の処理の一助としてリーマン面が導入される。複素平面を集めてきて、切って糊付するとかある。少々不安感すら持たれた方も多いだろうし、巧妙な工夫に嘆声を禁じえない少数派の方もおられよう。しかしリーマン面こそは、人為の産物ではなく、自然的先験的存在である多様体 (manifold) のはっきりした一例、そこでこそ代数函数論が育ちうる場であることは、Riemann (1829~1866) 自身にはっきり認識せられていた。彼の主要思想は、H. Weyl (1885~1955) の著作“リーマン面の概念”(1913)において明晰に基礎づけられ再現され、次代の解析多様体論の発展を待たばかりになった。これはまことに大問題であり W. Hodge 等有力な学者の多くの参加するところとなったが、モニュメンタルな仕事をいくつもなしとげ、それをいくつしみ育んできた人こそ他ならぬわが小平邦彦博士なのである。

まず初期 (1942~1944) に、リーマン多様体での調和テンソル場の存在を最も一般の形で解き、それらに対し、リーマン面の場合と同様の、リーマンロホ型定理の成立を証した。これによって Weyl の著書の過半は見事に一般化された。博士の学位論文である。そして、1950年に Weyl に招かれて渡米、彼地で18年の長きをすごされた。そこで、雑務を離れ専心数学の研究に打ち込まれた。先生自身のお言葉を借りると、ナマケモノに近い生活であった。昼な夕な夜な一途に数学研究にあけくれ、余事は一切怠ける。但し、ナマケモノは辛棒強い樹上生活で種族を保ったが、高尚な精神と隠れたる鋭

意努力があったかどうかは疑わしい。先生のさりげない口調に、笑いつつ自分の不勉強を恥じ入らされた人もあったろう。

ともかく、この研究生活から、おびただしく、偉大な仕事が続々生み出された。複素多様体論に解析的層が導入され、コホモロジーを調和形式で書き表わし、ついに、高次コホモロジーの消失定理に到達する。それを基礎に「ホッジ型多様体は射影的になる」という形に、リーマン面での函数の存在定理を最も一般にして強力な定理に結実せしめた (1954) のである。次いで、やはり Weyl の著書でふれられたモジュライの問題を、一般的に最も素朴な、根源的立場で問直し、複素構造の変形なる概念を絞り出して、その理論を500ページにのぼる一連の論文で基礎づけた (1957~1963)。更に、リーマン面を除くと最も簡単な複素解析多様体である解析曲面の精緻を極めた構造論、変形論が公にされた (1960~1968)。それらは、一般論のよい手引となって、役立ちもしたし、またそれ自身、抽象性一般性が幅をきかず現代数学にあって、いかにも実学としての確かさ、単純な美しい幾何的事実を色々提示してまことに興味深い。1967年の夏に帰日され、先生の深く、豊かな鋭い学識にふれることができたのは私共の深い喜びで、限りない感謝を禁じえない。

教授の仕事はこの他に、微分方程式、リー群、ヒルベルト空間など実に多種みられいづれも各方面で重要、しばしば基礎的である。これらは概して初期のものであるが、これらと、はじめにのべた調和積分論、代数幾何への応用などで第1巻、解析的層および変形論で第2巻、最後に曲面論をあわせて第3巻、として、小平邦彦論文集 K. KODAIRA: Collected Works が岩波書店より2月末に刊行されることも附記しておこう。

Silverfish の ごとく 40 年

門 司 正 三 (植物)

昭和9年ごろは、大学は不親切で、入学許可の通知はうけたが、いつでてもないでなかつた。植物園の教室で、4月半ばに講義がはじまったが、5月になると、現在の二号館への引越して、新入生も図書をしぼったり、トラックに積込んだりの奉仕をした。移転は一応6月に終り、7月はじめ日光へ、新任助教授の本田正次先生指導の分類学野外実習にでかけ、宿でビールの御馳走にあずかった。分類学教室は、腊葉室の乾燥をまて翌10年9月植物園から移転してきた。

植物系統学では、Spermatophyte (種子植物) に精虫があるかないかは、大問題であったが、1895年、教室助手の平瀬作五郎氏 (画かきさんであったという) が、植物園の大イチョウで動く精子を発見した。植物の研究には、生の材料が身近にあつて常に観察することが必要であり、植物学教室が植物園にあることによって、この大発見がなされたものと思つてゐた。しかし、実は、植物学教室が、本郷から植物園に移転したのは、精子発見の翌々年の明治30年夏であり、平瀬さんはせつせと銀杏の青い実を採りに炎天下をかよつたのであろう。トウダイもとクラシの例のごとく、案外植物園に定住すると、材料になれすぎて、発見できなかったのかもしれない。科学にはなれば禁物である。この4月から、植物学教室と植物園との話し合ひで、植物園を系統・分類学研究のメッカにしようという計画が進んでいる。研究者は、いつも三四郎であつてほしい。

さて、この精子について、一つの話がある。ずいぶん前のことであるが、大学本部の外事掛の女の方から電話で、「英文の大学カタログの The Ginkgo のなかに sperm という語が使つてあるが、このようなけがらわしい語を大学のカタログに使用するのほもつてのほかだ。というきつゝ抗議がアメリカの婦人からでているので、何とかしてほしい」との話があつた。こちらもいろいろしらべて、spermatozoid という植物学用語とかえてはと返事をしておいた。あれから、およそ10年、時代もかわつたものである。また、植物学教室が植物園に

あつたことによつて、R. Koch (1908. 6. 19), Albert Einstein (1922. 10. 20) などの署名が教室秘蔵の Guest Book にのつてゐる。

最近、ユネスコの MAB (人間と生物圏) 計画の調整理事会で、西独代表の Staudinger 夫人 (ノーベル化学賞1953年受賞者 Staudinger 博士未亡人) と親しくなつた。彼女の専門をたずねたところ、植物生理解剖学を、Prof. Haberlandt に学んだという。小生の恩師である中野治房教授は、日本で数すくない Haberlandt の弟子であり、ベルリンでソラマメの子葉の再生を研究された。この仕事は今日では発生学の分野にはいるのであろう。

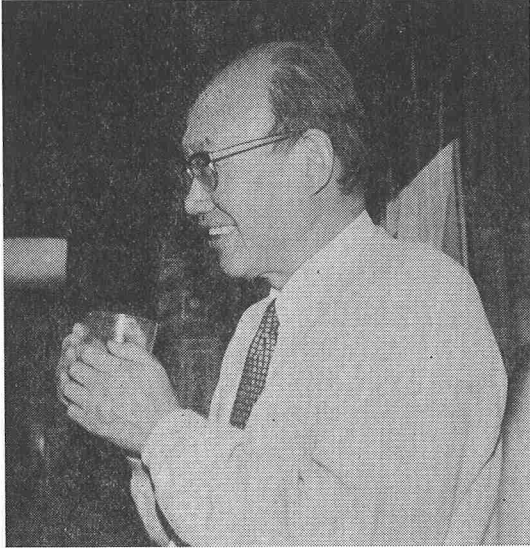
不肖の弟子は、研究の幅がせまく、中野先生の研究のほんの一部しか、つぐことができなかつた。しかし、先生の潮沼学は都立大の宝月欣二教授、教育大の市村俊英教授に、群落学は千葉大の沼田真教授に、生長素関係は教養学部八巻敏雄教授に、また泥炭の研究は地理の坂口豊助教授によつて、うけつがれてゐる。発生の仕事は、全く別途に古谷雅樹教授によつて発展されている。小生は Haberlandt の生理解剖学の手法を、集団レベルにあてはめたが、その微細構造を使つて群落光合成の理論式を組立てて植物生産の基礎をきづいたのは、当時後期学生であつた佐伯敏郎助教授である。

また、植物生理解剖学の一つとして、ダイズの莢の X 線写真を、中期のときに講義をぬすみ聞きした寺田寅彦先生の弟子の平田森三先生指導で、物理学教室でとらせていただいたのは1941年の夏であつた。これは平田先生の学位論文の審査を教授会で聞かれた中野先生が刺激をうけて、小生に命ぜられたものである。さらに、この仕事をするにあつて、セルローズミセルの排列方向を知るため地質の坪井誠太郎先生の教えをうけた。学問とは食物網 food web のごときものである。

その他いろいろな方のおかげによつて、紙魚のごとくつぶされもせず40年間無事に過ごすことができたことを深く感謝して筆をおく。

門 司 先 生 の 御 活 躍

佐 伯 敏 郎 (植物)



門司正三先生 (研究室にて)

植物の蒸散作用の生理学から手をそめられた先生の御研究は、1938年の最初の論文発表にはじまり、1944年に公表された「気孔調節と蒸散作用」の学位論文(1944)に集成されている。論文の外にもれたデータを含めて、そこには地道なデータの集積があり、未発達な当時の計器に工夫をこらしながら、物理的なアプローチを進められた労苦のあとがうかがわれる。この中間にマメのさやの裂開機構という風変りな論文がみられ、それ自身すぐれたものであったが、その後の発展に続けなかったのは対照が「死んだもの」であったからというお話であった。先生の指導下にあつたといわれる現農工大田崎教授のクロマツ林の芽生えの研究は、それまでの実験室的な仕事を野外の植物の生活へ広げる最初の機会だったと思われる。

1943年に生態学の講義を受持たれるようになってからは、生態学の方法をどのように進めるべきかに熱中しておられたとのことである。学生として1948年始めて研究室に顔を出すようになった私には、森 健志名大教授、宝月欣二都立大教授らと高度な討論にあけくれて

いた当時の研究室の雰囲気的印象的であった。

1949年春からは、いよいよ初めての野外研究の場として、埼玉県荒川沿岸の田島ヶ原附近の草原への日参が始められた。雨ではないが曇った日が照度の測定上望ましく、毎日雲の行方でその日の天候をうらなう日が続いた。完全に雨の日と雲のない晴れた日だけがお休みの日であった。照度の測定と新たに開発された層別刈取法がフィールドでの主な仕事であった。この仕事は、2年間続けられた上、3年目の補足を加えて1953年の有名な論文になった。そこにはそれまでに練られた生態学の方法論のあるべき姿が確固として語られている。この論文にはさまざまな新しい方法とそれにもとづく豊富なデータ、理論等が盛られているが、続いて出された2つの大きな論文に盛られた内容と方法とあわせて、それから二十何年かの門司研究室に所属した多数の学生の指導原理となった。

生態学的現象を物質生産を基礎として明らかにしていこうという方向は、水界の一次生産の研究でも、市村教育大教授らにひきつがれて見事な成果をおさめている。また当時は予期されていなかったと思われる、林学、作物学、農業気象学への影響は大きく、今でも続いている。

1960年の物質再生産の論文も学界に重要な貢献をしたものとして忘れられない。具体的内容は論文発表前にも講義で我々になじみになっていたが、生活型にのって重厚にまとめられた論文をみた時は改めて驚かされたものである。

物質生産に関する業績がゆっくり世界に浸透するようになった頃、国際生物学事業計画(IBM, 1965~1974)が発案され、先生が意を決せられて1964年の最初の会合に出席されてからは、理農医にまたがる困難な国際的研究の組織化に全力をあげられた。その御努力の結果は日本の成果と学問間の交流の実となって十分に現れているといえよう。さらにIBMにつづいてMAB(人間と生物圏計画)へと国際的な研究計画が持ち上がったため、それに対するかかわりをお断りになれず、席をあたためる余裕をなかなかおもちになれないのが実情である。

門 司 正 三 教 授

古 沢 潔 夫 (植物園)

教授は、いろいろと、たくさんの特徴を、お持ちですから——編集の方のいわれるように——その一端を、ここに記します。

門司教授はサイエンスの中道を進んでこられた。左に道を外れ、観念論の域に踏入ることなく、右へ片寄って、無味乾燥な記載学の手摺に凭り掛ることなく、常に中庸を持して、大地に根を張る植物が、太陽の光を求める如く、休むことなく、垣々と一歩一歩を踏みしめて、植物生態学に、光明ある分野を開拓された。

学問の大道の左の端すれすれに、巧みなアクロバットよろしく、仮説の空理を弄ぶ如き先輩を左目でみや

り、「アレデハ、アブナイね。」と——。

右の眼では、道の右側ぎりぎりに、思想を避け、(全くの無思想か?) 幾十年、機械的操作を繰返して厭きない同僚を見据え、決して、それに誘われることなく、「アレデハ、オモシロクナイよ。」と——。

自らは、不偏、不党、似而非哲学的、疑似宗教的な、思弁を斥ぞけ、スタイン・コップフに墮することなく、自然科学の中央線を、毎日、破綻なく運行してこられました。(昭和五十年元旦、マイン河のほとり、マインツにて)

定 年 所 感

浜 口 博 (化学)

人生の一つの転機となるであろう日が定まっていた、それが刻々と近付いてくる、つまり秒読みに入った心境とは、経験してみないとわからない一種独特な妙なものである。あれをやっておかなければならぬ、これもやりとげたい、などと思うばかりで一向に何もできないもどかしさを感じる。数年前に退官した文学部の先輩が「きみ、定年前の1、2年はあつという間に過ぎてしまうものだよ」と述懐していたが、まさにその通りである。すこし緊迫感におそわれるあわただしいこの頃になって、また妙に懐古の心も湧いてくる。

東京大学の教官の多くはおそらく学生時代を東京大学で過ごし、卒業後もずっと東京大学で奉職されているものであろう。そうでない場合でも東京大学を離れている期間は短かいかたが多い。化学教室の教官もそうであるが、私だけは例外で東京大学を卒業してから37年におよぶ教職期間のおよそ3分の1だけ理学部教授のお仲間入りをさせていただいたに過ぎない。私は昭和39年放射化学講座担当として赴任した。放射化学講座は昭和31年に東京大学原子力教育研究体制下の最初の講座として設置され、理学部化学教室あづかりとなった特殊講座であった。この東京大学原子力教育研究体制では全学的に協力して進めようとの機運が強く、その後理・工・農・医の各学部につきつぎに原子力関係講座が開設され、それらは浅野邸に建設される予定の原子力総合本館

に集中的に研究室を持ち、学部間の協力によって原子力の教育研究の提進をはかろうとの構想であった。ところが原子力共用の研究設備の新設は比較的順調に進んだものの、汗心の総合本館の建築はその後の長年にわたる関係者の努力のいかにもなく実現せず、ついに原子力教育研究体制の一部変更がなされ、研究協力を目的とする原子力研究総合センターが昭和47年5月に発足し、各講座は最も適当な場所に研究の本拠をおくということで従来の体制を清算する結果となった。このことを通じて学部間の協力体制というものが如何にむづかしいものであるかを痛感させられた次第である。

私は赴任に際し浅野邸に研究室を持つことができる見込をもってきたのであるが、上のような事情でなかなか研究の本拠が定まらず、その間原子力工学科教室建物の一部と化学教室に分散したタコ足研究室をもち、教育面でも工学部と理学部両方を分担するという不安定な状況に置かれて、ずいぶん苦勞した。能力のないものがさらに力を分散するということは、結局ろくなことはできないという結果になるもので、振り返つてみるに、たいしたお役に立つこともできず、誠に申訳なく心残りであります。しかし短かかった在任期間を通じ、あらゆる面で優れた教職員の皆様に接して啓発されること多く、お世話になったことに心から感謝の気持ちでいっぱいではありません。理学部の将来の発展を念じてやみません。

浜 口 博 先 生

馬 淵 久 夫 (化学)



浜口 博先生 (研究室にて)

浜口 博先生は昭和 12 年本学部化学科を御卒業後、秋田鉱山専門学校、第一高等学校を経て、昭和 22 年東京文理科大学助教授に就任されました。戦後日まだ浅く、荒廃した文理大キャンパスに新しい研究室を建設され、教育制度の改革による東京教育大学への移行後も分析化学担当の教授として幾多の人材を育成されました。昭和 39 年より本学部教授に迎えられ放射化学講座を担当されて今日に至りました。

浜口先生の御研究の足跡を迎るとき誰もが感じるものは、一貫して流れている分析化学者としての厳しい態度であります。“誤りのないデータ”をモットーとされた先生は弟子どもの発表する分析値に対しても容赦ない質問を寄せられ、その不備を突かれました。日頃の温容に慣れた者もこの時ばかりは襟を正さざるを得ない思いでありました。

先生の研究活動の中心は地球化学、宇宙化学的に重要な微量元素の定量分析といえますが、それらの成果は発表当時よりも 5 年、10 年と時間が経って初めて高く評価される場合が多く、その先見の明には関係者一同の深く敬服するところでありました。二三の例を挙げると、化学科卒業後間もなく始められた一連の「深海底土の化学的研究」の中で求められたベリリウム、マンガン、ニッケルなどのデータは、最近宇宙塵の痕跡を海底土中に

求めようとする者にとって重要な参考値となっっています。また、シカゴの Enrico Fermi Institute での御研究の成果である、いん石中のウランの定量値 (1957 年) は、当時開発されたばかりの放射化学分析法を駆使して従来の分析値が全く誤りであることを指摘したもので、20 年近く経過した今日でも関係論文に必ず引用されています。天文学、宇宙物理学、宇宙化学などで用いられる“元素の宇宙存在度”の中には先生の出された正確なデータがウランを始めいくつか取り入れられています。

1956 年アメリカより帰国された先生は放射化学分析法を用いて多数の試料の微量元素を定量し、国内における放射化学分析法普及の先駆的役割を果たされました。その功により 1966 年日本分析化学会賞を受賞されました。

一方、教育においても先生は優れた能力を示されました。先にも述べましたように研究指導においては一貫した厳しい方針を堅持される一方、個人の資質を育成されることにひたむきな努力と思ひ遣いを示され、幾多の人材を世に送られました。東京教育大学から本学まで通じて 100 余名の弟子を育てられたことになりましたが、いずれも分析化学、放射化学、地球化学、原子力科学などの分野で重要な活躍をしています。

先生について語るときに忘れられないのは御趣味の広さです。学生時代には弓道部で活躍されると同時にスキーに専念され、一方では囲碁をたしなまれるという生活だったと漏れ聞いています。囲碁は現在も続けられて居り、化学界の高位者として君臨しています。先生のお宅を訪れる者は丹精した庭の草花に目をみはり、食堂の片隅に泳ぐ見事な金魚の群に驚きます。ここにも生ける者愛する先生の御人柄をうかがい知ることができます。

御退官後の先生は財団法人日本分析センターの理事長として、また日本分析化学会会長としてわが国の分析化学界のなかめの役を果たされることになっています。近年、先生は「分析値の信頼性」に特に関心を寄せられ、関係学界で多数の講演を行ないました。公害問題など社会的にも重要視されるようになったこの分野の柱として先生ほど適当な方は居られないと思うにつけ、今後の御活躍を心から祈る次第であります。

古典と原典

蟻川達夫 (物理)

今年に入って清水先生から「私の読んだ本」に何か書くことを依頼された。これから何かを読めばよいという軽い気持でお引き受けはしたものの、さて何を讀もうかと考えていたある日「化学の原典」(東大出版会)という本が送られてきた。今日の化学の基礎をなした「原典」数篇を選びその翻訳に解説を加えたものである。何号か前の広報に朽津先生がこの本の出版の動機、編集の裏ばなしなどを面白くお書きになられ、一度読んでみたいと思っていたところなので好都合であった。

この本の趣旨は一つには「古典に還れ」ということだと朽津先生も書かれている。現代においては全ての学問がほとんど例外なしに細分化され分業化の道をたどっている。たしかに学問そのものは、より精密になりまたより正確になることは誰もが疑わない。 10^{-12} という驚異的な精度で測定されている超微細構造も、やがて理論の精度(現在は $\sim 10^{-6}$) がもっとあがれば量子電磁力学の検証につながるというような期待は勿論大きい。しかし分業化の学問にならされている現代人にとっては、ともすれば全体の視野を見失ないやすく、「中心の喪失」につながる危険性を多分にはらんでいる。これもディーゼルマイヤーのいう現代文化のたどる運命と簡単に見すごしてよいとも思われぬ。さて「原典」にもどって「誰々の理論とか実験結果が引用なしに出て来るのに閉口した」とも編集の感想にもらしている。たしかに当時はそれで十分であったのであろうし、また化学に「中心」が存在していたのであろう。この中心を大局的につかみ直すことこそ大切なことであり、また編集者の意図するところと思われる。現代の学問的知識をもって原典(正確には原典の翻訳だが)を読むこと自体は比較的容易なことはたしかであろう。しかし学問と科学技術の進歩を基盤とした学問的「常識」を完全に否定して、実験技術、理論体系ともに十分でなかった当時の背景に自から溶け込まないかぎり、新しい目をもって原典に接することは出来ない筈である。この意味で「訳著の書かれた解説は例外なしに面白かった」と同時に大変有益なものであった。長い間正しいと信じられてきた定理、定説という「常識」を否定することは常人の容易になせるわざでは

ない。ソクラテスでさえアテナイの常識人の怒りを受けて命を落してしまった。

さて話がとんで恐縮であるが、柿本人麿の人間像を分析した学説が面白い。人麿といえど家持とともに万葉集を代表する歌人であることはいうまでもない。当然人麿に関する研究は数多くある。しかし三百年もの間全ての研究の「原典」とされてきたものは、契沖、真淵によって確立された人麿の姿、すなわち「若き日に舎人として天皇にこ従して絢爛豪華な歌をよみ、晩年は地方の下級官吏として諸国に就任し、石見のくにで五十足らざる命を終えた詩人」(さまよえる歌集: 梅原 猛著)なのである。たしかに収税吏として諸国をわたり歩けば旅の歌も多かるうと納得はゆく。しかしかつては正三位であった人麿の死が日本書紀に記載されていない——正三位以上は日本書紀にのせる習わしになっていた——という理由だけからでもあるまいが、契沖は六位という下級官吏に、真淵は収税吏と勝手に任命してしまったのである。ここに見られるものは全く deductive な数学的発想法であり、数式の美しさのみにこだわりすぎて自然現象を説明することをわすれた理論、所せん「唄をわすれたカナリヤ」なのである。この契沖、真淵の徹底した合理主義のゆきすぎをこの著者は見逃がさなかった。もともと人麿について語られるときはいつも深くべールにつつまれた部分が多い。そこには非合理性、すなわちある意味での仮説の介入する余地が十分あるのである。そこで「原典」の徹底的否定から始め、全く新しい目で古い資料を見直した結果得たこの著者の結論はこうである。「人麿は流人で、その死は刑死だった」のである。かくして新しい学説は生れた。「かつて天武、持統帝に気に入られ大夫職の重職にあり、宮廷第一の詩人として活躍しながら律令体制の整備とともに体制からはじき出され、流人としてあちこちをさまよった後に、ついに石見のくに高津の沖合で水死する老詩人」(さまよえる歌集)の姿である。大担にも学界の通説にあえて挑戦し、真実の古代像をくっきりとよみがえらせるくだりは「さまよえる歌集」の続篇ともいえる「水底の歌」に面白く展開される。しかしこれを論証する inductive な思考過程

は、まさに物理、化学とまったく相通ずる明解さそのものなのである。専門外の私にはどちらの学説が「原典」としてよりふさわしいかの判定を下すすべがない。しかし非合理性を重視した後者により物理的な臭を感じとることは否めない。この非合理性は国学者として最もすぐれた人宜長に至りその古事記伝に如実にあらわれる。その根底に流れる思想は、全くカテゴリーの異なる物理、化学の最高の座にある P. Debye のそれと全く同じなのである。つまり「古事記において認識出来ないことがあってもそれは古事記の方に責任があるのではなく、われわれの理性の方にある。つまりわれわれの理性は神の言葉を完全に理解するにはあまりに不完全なので、理解出来ない事があっても、それはわれわれの理性の不完全さのせいである」(古典の発見)とする 宜長の態度は、Debye を追想して語る同僚の言葉「Debye の本質は単純化にあった。彼は現象の見かけ上の複雑さは理解の不足によるものと見なした。したがって事物の核心と末梢とを分けて核心を捉え、これを明白に表現し追求した。

Debye の数学的才能は最高水準にありながら、自然現象を説明するのに単なる数学的説明は彼の最も嫌うものであった」(化学の原典)にそのままつながるのである。化学の原典の冒頭に記されてあるように、創造的な研究を展開するには化学の基礎をなした原典に接し、その研究態度、研究方法を体得し、化学の真の姿を認識することにあるという編集者の意図の一端はこのあたりにあるのであろう。「人間というものはとかくきびしい真理の女神より、虚偽の淫女につかえることを好むものである。そして虚偽の淫女が常識という仮面をかむって、長い間人々に信じられているとき、あたかもその淫女は、真理の女神より一層女神らしく見えるものである。」(隠された十字架)

- 日本化学会編「化学の原典」東大出版会 1974.
 梅原 猛著「さまよえる歌集」集英社 1974.
 ” 「水底の歌」新潮社 1973.
 ” 「隠された十字架」新潮社 1972.

＜学部消息＞

12 月理学部会合日誌

- 9 日 (月) 12:30~13:50 学部長と理職との定例交渉
 14:00~15:10 理学系研究科委員会
 11 日 (水) 13:30~15:00 人事委員会
 18 日 (水) 13:00~15:50 教授会
 25 日 (水) 15:00~16:00 主任会議

1 月理学部会合日誌

- 13 日 (月) 10:30~12:00 会計委員会
 13:00~15:00 教務委員会
 14:00~17:00 理学系
 21 日 (火) 13:00~14:30 人事委員会
 22 日 (水) 13:00~16:20 教授会
 29 日 (水) 15:00~17:00 アイソトープ委員会

教授会メモ

12 月 18 日 (水) 定例教授会
 理学部四号館 1320

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動等の報告
3. 人事委員会報告 (木原)
 定員削減について (学部長)

4. 会計委員会報告 (吉川)
 - i) 50 年度営繕工事要求事項
 - ii) 49 年度設備更新費配分案
 - iii) 職員厚生資金の件
5. 教務委員会報告 (朽津)
 - i) 便覧訂正の件
 - ii) 第 4 学期時間割について
6. 寄付 1 件の承認
7. 入試制度検討委員会委員の選出
 岩堀教授, 荒田助教授
8. 入試総監督 (理学部)
 朽津教授
9. 100 年記念事業のための準備金の募集について
10. 建築関係
 - i) マスタープランアンケートに対する意見書提出の件
 - ii) 理学部五号館について
11. 将来計画委員会中間報告について
12. 環境安全委員会報告 (藤原)
 - i) 排水検査の件
 - ii) 廃溶媒処理の件
13. 第二図書館構想について
14. 研究教育用放射性同位元素の取扱いと費用の学部負担について
15. 柿岡の土地監査 (水戸財務局) についての報告 (福島)

1 月 22 日 (水) 定例教授会
理学部四号館 1320

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動等の報告
3. 人事委員報告 (木原)
4. 定員制限について (学部長)
5. 教務委員会報告 (朽津)
 - i) 拡大教務委員会開催について
 - ii) 夏・冬学期の日程の変更について
 - iii) 全学ゼミナールについて
6. 臨カリ委員会報告 (霜田)
 - i) 50 年度一般教育科目時間割り決定
 - ii) 50 年度夏学期全学ゼミナール
申込み：3 月はじめまでに
 - iii) 臨カリ委員会の解消と、新しい全学的カリキュラム委員会の設置について
7. 入試総監督 (朽津教授) 補佐として
橋本教授, 佐伯助教授
8. 将来計画委員会報告 (黒田)
新キャンパス計画を考える上での理学部の規模を知るため近く設備等に関するアンケート調査を行う。
9. 会計委員会報告 (吉川)
営繕関係部長保留金を用意する件について
10. 文教関係予算の誤明 (学部長)
11. 建築関係 (下郡山)
12. アイソトープ管理を再検討する委員会の発足について
13. 学部長選挙
植村教授が再選された。任期 1 年
14. 臨海実験所長についての可否投票
動物学教室から推挙された寺山教授にきまった。
15. 植物園長についての可否投票
植物学教室から推挙された下郡山教授にきまった。
16. 情報科学研究施設長についての可否投票
当施設から推挙された後藤教授にきまった。
17. 情報科学研究施設長・高橋教授, 臨海実験所長・小林教授からそれぞれ挨拶があった。
18. 次期会計委員の選出 (半数交代)
田村, 江上, 宮沢 (辰) 三教授が選出された。
19. 次期人事委員の選出 (半数交代)
稲本直樹, 古谷雅樹, 宮沢弘成の三教授が選出された。

人 事 異 動

教室	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
植 物		坂 野 勝 啓	49. 11. 1	助手に採用	
動 物	助 手	土 屋 禎 三	49. 11. 30	退 職	
動 物		本 川 達 雄	50. 1. 1	助手に採用	
物 理	助 手	石 岡 俊 也	50. 1. 1	休 職	
高エネルギー 物 理 学 実 験 施 設	助 手	高 崎 史 彦	50. 1. 1	高エネルギー物理学研究所助手 に転任	
植 物	助 手	戸 塚 績	50. 1. 16	国立公害研究所主任研究員	

12 月 海 外 渡 航 者

教室	職名	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物 理	教 授	飯 田 修 一	アメリカ合衆国	12. 1~12. 22	第 20 回磁気および磁性材料 会議および磁気バブル会議出 席並びに物理学に関する研究 連絡のため
地 球	教 授	浅 田 敏	アメリカ合衆国	12. 5~12. 12	国際地球内部ダイナミックス 研究計画連合間委員会第 1 回 作業委員会出席のため
地 球	教 授	小 嶋 稔	アメリカ合衆国	12. 7~12. 12	国際ウーラードシンポジウム 出席のため

人類	助教授	尾本恵市	フィリピン オーストラリア ニューギニア	12. 23~ 50. 1. 11	蛋白多型からみた太平洋地球 人類集団の遺伝的多様性につ いての研究
動物	助手	新田毅	ソビエト連邦共和国	12. 20~ 50. 10. 20	メッセンジャー RNA の生合 成制御機構に関する研究のため

1月海外渡航者

教室	職名	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
人類	教授	渡辺直経	インドネシア	1. 3~ 1. 16	化石人類遺跡予察調査のため
地質	教授	立見辰雄	フランス	1. 25~ 2. 2	国際地質対比計画 (IGCP) 第 3 科学委員会第 2 回会議出席 のため
物理	助教授	有馬朗人	ドイツ連邦共和国	1. 11~ 1. 26	原子核の大局的性質について のヒルシュグ会議出席並びに 原子核に関する研究連絡のため
地物研	助手	飯島健	アメリカ合衆国	1. 11~ 51. 1. 10	地球電離圏・地気圏の電磁気 学に関する共同研究のため
地物研	助手	小川利紘	アメリカ合衆国	1. 31~ 2. 15	成層圏微量大気成分の研究の ため

理学博士学位授与者

昭和 49 年 12 月 9 日付授与者

専門課程	氏名	論文題目
学位規則第 3 条 2 項該当	石井敏彦	Study of the growth of single Crystals of aluminum nitride. 窒化アルミニウムの単結晶の成長に関する研究

昭和 50 年 1 月 13 日付授与者

専門課程	氏名	論文題目
植物学	竹内安明	Respiration-dependent uncoupler-stimulated ATPase activity in castor bean endosperm mitochondria and submitochondrial particles. トウゴマ種子胚乳のミトコンドリアおよび亜ミトコンドリア粒子における呼吸依存の除共役剤による ATP アーゼの活性化
同	安西正	Adventitious root formation and action of heliangine in <i>Phaseolus mungo</i> hypocotyls. モヤシマメ胚軸における不定根形成と heliangine の作用
学位規則第 3 条 2 項該当	田附雄一	ハイゼンベルグ型 1 次元反強磁性体 $C_8M_nCl_3 \cdot 2H_2O$ の磁性の ESR による研究
同	江口新比古	Studies on Cyclic Dipeptides and Hydroxyproline. 環状ジペプチドとオキシプロリンに関する研究
同	山田耕作	Perturbation Expansion for the Anderson Hamiltonian II. アンダーソン・ハミルトニアンの振動展開 II
同	土屋禎三	Effects of calcium on Triton-extracted lamellibranch gill cilia: ciliary arrest response in a model system. トリトン抽出二枚貝鰓纖毛に対する Ca イオンの作用—纖毛モデルにおける
同	芦原坦	Studies on the pentose phosphate pathway in higher plants. Its physiological significance and regulation. 高等植物におけるペントースリン酸経路の研究。その生理的意義と調節

理職と学部長の交渉

9月25日(水) 12時17分~1時11分

出席者：学部長，事務長ほか6名，理職委員長ほか7名。

議事：

1. はじめに理職から出された文書の内容説明があった。学部長交渉の内容を文書で確認するという理職の要求の根拠を説明したもので、理職は陳情団体ではなく、団体交渉権を保障された組合なので、文書の交換は法律的にもおかしくない。それをしなければ交渉というよりも陳情になってしまうというのがその骨子である。

これに対し学部側から原則として文書確認をすとかしないとか決める気はない。交渉の席で出た問題は処理できるものは早く処理し、できないものははっきり断っている。その程度の問題に文書確認をしても益はない。両方の間に利害の対立があって、それが解決されたような場合には文書確認をすればよい。一般に問題の解決にはその時の客観情勢が背景として作用している。文書確認の不便な点は、その後の客観情勢の変化を反映できないにもかかわらず、その確認事項を後任者も尊重する立場になることにあり、従って文書確認には一般的に慎重にならざるを得ないとの回答があった。続いて学部側から、理学部広報にこの交渉の記事を載せ始めたのは組合員・非組合員全体に交渉内容を知って貰うため、記事の内容については理職と協議している。その上に文書確認が必要な理由は何かとの質問があった。理職は広報の記事にどう載せるかが問題になる場合があると答え、結局記事について同意ができなかったら、その件は継続交渉事項になるということで、広報掲載の件について大筋において合意した。

2. 理職から研究費の問題、補正予算に対する対策について質問があり、学部長から各教室の実態調査の結果は会計委員会で予算配分の参考にしたこと。経常費の増加については国大協や理学部部長会議を通じて要望しているとの返事があった。

3. 理職から、行政職1の6等級高位号俸が特に婦人職員の行き止まりの形になっているが善処して欲しいとの要望があり、事務長から二度申入れをして、よく検討するとの回答を得ているとの答があった。

4. 理職から7月の人事院勧告の早期実施のため全学的努力をされたいとの要望があった。

5. 理職からドライアイスの申込時間が不便なので変更して欲しいとの発言があり、事務長から用度に連絡することになった。

12月9日(月) 12時34分~1時50分

出席者：学部長，事務長ほか5名，理職委員長ほか8名。

議事：

1. 学部長から理学部五号館の建設予算が支出されることになり、来年度着工、再来年度完成の予定で建設されることになったとの説明があった。理職から職員・学生の意見を反映する方法について質問があり、設計の細部については数学と地鉄の教室に担当者も決まっており、反映の方法も各教室に任せてあるとの回答があった。

2. 理職と学部長の交渉についての広報記事に関し、理職から広報に掲載する確定原稿は、学部側、理職側がそれぞれの草案をつくり、双方の確認にもとづいて作るようにしたいとの要求があった。学部長から広報は理職組合員のみを対象としたものではないこと、記事の責任は学部側にあり編集権も学部側にあること、従って記事原案を学部側で作る、事前に理職と協議するという今迄のやり方で悪くない。メモを提出されるのは結構であるが、記事の作成はそれが出なければできないというので困るとの答があった。

3. 理職から12月退職の職員に対して、ベースアップ分の追給は退職後になっても出るかとの質問があり、事務長が出ると答えた。

4. 理職からパートタイムの第二種臨時職員にも同じ仕事と同じ賃金を支払うという立場からボーナスを支給するようにとの要望があった。学部側から、規則上、それはできないとの返事があり、かなり長い間やりとりが続いた。

5. 理職から勧奨退職のときの勧奨のしかたについて質問があり、事務長から退職予定者は年度はじめにわかっているもので、中央事務では事務長、教室では主任が、直接本人に勧奨している。退職時期の3カ月ぐらい前に本部から照会が来るが、遅くともそれまでには勧奨しているとの回答があった。停年についての質問に対して、教官は60才になって次の3月31日、事務長は61才に達した日の年度末、事務長補佐は63才、一般の事務系職員は65才、用務員は67才のそれぞれ四半期毎である。最近では3月31日を翌日の4月1日としているとの答があった。

お知らせ

理学部紀要の近刊

理学部紀要 第IV類 動物学 第13巻 第2号が発行された。10篇の論文が掲載されている。

学術奨励金などの公募

- i) 昭和 50 年度朝日学術奨励金
- ii) 昭和 50 年度日本証券奨学財団助成金
- iii) 湯川奨学会奨学生
- iv) 放射線医学総合研究所 50 年度外来研究員
- v) 三菱財団自然科学研究助成金

以上の件については関係教室事務室または理学部庶務係へお問い合わせ下さい。

編集後記：3人の先生方を中心にした本号は、関係の先生方に大へんな御無理をお願いいたしました。執筆者の人数が多いために、予定より発行日が大幅におくれましたことをお詫びいたします。なお、次号も鋭意編集中であります。本号と同じような特輯号であり、若干発行日がおくれますので御了承下さい。

次に、広報と大へん関係の深かった小野(旧姓：大山)久美子さんが、昨年未で退職されました。渡辺先生以来、六代の理学部長秘書としてあしかけ11年間勤められたばかりでなく、久保先生、小平先生そして現植村先生と三代にわたる“理学部広報”の編集をお手伝い頂き、私共には、全くかけがえのない有能な存在でした。広報編集部からの心からの謝辞は、おそらく理学部の皆様の共通の御気持と思います。後記の一部をかりて、“小野さん、長い間御苦勞様でした。お幸せに！”を記させていただきます。(こ)

.....

編集：

(小堀 巖 (地理) 理2号館205号室 内線 6449)
(清水 忠雄 (物理) 理1号館372号室 内線 2783)